●絵本も漢字かな交じりのものを

絵本は、読書の楽しさを知る出発点となるものです。それと同時に、子どもがまだ出合ったことのないものや場所、そして鬼や妖精（ようせい）といった想像上の生き物をも、絵とお話によって生きいきとイメージさせることによって、語彙を豊かにし、また想像力や感受性をも伸ばしてくれるものです。

ですから、お子さんには最初からなるべく良質のものを与えてあげたいものです。

ところが残念なことに、市販されている幼児用の絵本は、そのほとんどがひらがなだけで書かれています。

こうしたひらがなだけの絵本を与えてしまうと、お子さんがせっかく覚えた漢字の知識が少しも生かされないばかりでなく、お母さんが読むのを聞きながら活字を目で追っているうちに、やがて、ひらがなで本を読む癖がついてしまいます。「漢字でもひらがなでも、とにかく本が読めるようになれば大したもの」と思われるかもしれませんが、実はそこには雲泥の差があります。

音とともに意味を併せもつ“見る言葉”である漢字と違い、ひらがなは音だけしか表しません。それで、ひらがなだけの絵本を与えた場合、子どもが「本を読める」といっても実際には言葉の意味がわからないまま音だけなぞって読む、いわゆる“拾い読み”をしているだけで、きちんと内容を理解していないことのほうが多いのです。

そればかりか一度ひらがなで読む習慣がつくと、漢字かな交じりの文章を読むようになってからも、常に言葉をいったん頭の中で音に置き換えてから言葉の意味を理解する、という思考回路が定着してしまうため、漢字かな交じりの本で育った子どもに比べ、読書のスピードもかなり遅くなってしまいます。

このような理由から、私は、子どもには最初から漢字かな交じりの絵本を与えてあげるべきだと考え、石井式漢字教育の実践園や教室では、私が監修したオリジナルの漢字の絵本を教材として使っています。家庭で漢字学習を進めていくうえでも、こうした絵本を上手に活用してみるのもよいでしょう。

もちろん、漢字学習にはこの絵本が不可欠ということではありません。市販の幼児用絵本でも、漢字表記にしたほうが自然な箇所に正しい漢字を書いた紙を貼ってあげればよいのです。たとえば「むかしむかしあるところに　おじいさんとおばあさんがすんでいました」という冒頭の一節であれば、「昔々　ある所に　お爺さんとお婆さんが　住んでいました」という具合に直し、手製の漢字かな交じりの絵本を作ってしまうわけです。